アルフレート・ウェーバー著
『文化社会学としての文化史』翻訳研究

——その 7[1]——

柴　野　博　子

B. 地中海古代

I. 総　論

近東地域が最初の第二次文化の段階に達成したあの世界史的な，後に根本的な作用を及ぼすようになる諸成果から，つまり宗教的な諸成果から，西洋に目を転ずるならば，そこには二つの注目すべき事柄がある。第一は，地理的空間に関する事柄である。すなわち，東方と競争し，遂にこれを打ち負かすような西洋の最初の偉大な第二次文化が展開する舞台は，人類の先史時代にかつて非常に重要であった，また西半球にとって明らかに決定的な意味をもっていたあのヨーロッパ大陸ではない，ということである。その舞台となるのは，海洋であり，その沿岸地帯，半島及び島である。そして東方も統合されるこの期の終りになってはじめて，ヨーロッパの大陸部が——しかもこの時もただ消極的に——海洋によって，中心地である地中海圏によって，再び高度な歴史と文化史の中に引き入れられるのである。

第二の注目すべき点は，ギリシア精神とローマ精神において頂点に達するこの地中海圏が明るい晴天の日のような印象を与える，ということである。人々は，そのほかは華やかな東方世界の中に世界史上最も固有なものとしてはめ込まれていたあの恐ろしい運命の洞窟から，この明るい晴天の日の中へ歩み出している。人々は，人間の苦悩を抜け出して人間自身に，自分自身の中で安んじている人間に到達しているように思われる。この印象は，表面的には正しいが，

しかし深く堀り下げてみなければならない。彼等は，本当は，自分の運命に支配されないということをその最高のこととしながらも，人間存在の深淵を最も深く認識しているようなそうした人間の領域に足を踏み入れているのである。彼等は同時に次のような人間に到達している。すなわち，そのプロメテウス的態度が，歴史上はじめて，この態度そのものによって人類の文明と文化を脅かすようになり，遂にはこれらの文明と文化を内部から崩壊し，あらゆる文化的符号を逆転させるに至った，そのような人間である。ここには人間の運命をはじめはこの上もなく力強く肯定しながら，後には，近東の深い問題性に立ち入りつゝ，それをこの上もなく見事に否定するような文化が誕生している。この文化は，この否定と肯定とを通して，次の層の豊かさと同時にその二律背反的な問題性，その限りなき矛盾性を予め決定しながら，第二次文化の第二層に対して，その土台となり予備形成となったのである。なぜなら第二層のそれぞれの歩みは，最初の成層の矛盾に満ちた伝統との積極的ないし消極的な対決となるからである。

地中海は，このどこでも未だ経験したことのない人類のドラマの壮大な舞台となる。言い換えれば，そのまわりで人類のドラマが完成するその空間となるのである。

これには二つの理由がある。一つは，気候の悪化が中部及び北ヨーロッパ——その未だ温暖で乾燥した草原地帯には，アジア出身の馬に慣れた，また農耕の知識をもったインド＝ゲルマン系の騎馬民族が3000年から2500年頃まで大規模なメンヒル文化を樹立していた——を，徐々に寒冷な，そしてその後は深い森におゝわれた冷涼で湿潤な地域に変えた，ということである。この気候の悪化はその地域の住民たちを非常に鍛えたが，それはそのことによって，同時に，未だなかば放浪生活をしていた彼等を，南方や東南方面へ，つまり地中海の沿岸や半島へ，またそのもっと明るく容易な可能性の方へかりたてることになった。こうして気候の悪化は，地中海海盆を非常に長い間，以前高度な特質を育成していた北方諸民族の移動の目的地とし，またその発展の舞台としたのである。

他方またこの地中海は，既に二つの根源的文化が成立して以来，その入口のところにあって，その影響をまともに受ける地域であった。従って地中海とその周辺には，非常に早くから，いくつかの文化が生れた。すなわちその東の海盆にはエーゲ＝クレタ文化が，またその沿岸には，古い高度文化の直接的な影響の下に，トロヤ文化が発生した。やがて近東一帯が戦争と抑圧の地と化すと，このすでに早くから商人たちの行き交っていた地中海は，北アフリカへ進出したフェニキア人にとってばかりでなく，リディアから興り，イタリアの北西部に上陸したあのエトルリア人にとっても，植民地的性格をもった恰好の避難所となった。

北方からやってくるインド＝ゲルマン民族とこれらの文化——及びその淵源の地である西南アジア的東方——との対決，これこそギリシア＝ローマを中心とする地中海古代の外的歴史を形成するものであった。この対決は，母権制的な基盤の上で行われた。なぜなら地中海海盆は，かつて亜氷河時代に湿潤地帯の一部として，母権制に支配されていたからである。この対決は，同時に，地中海古代が世界にもたらしたあの比類なきものに対して，単にその枠組を作っただけではなく，その条件をも生み出したのである。

この比類なきものに対して，文化的に見ると，ギリシア人が決定的な意味をもっている。しかも二つの相矛盾するような方向において，いずれにしても二重の態度と形象において，決定的な意味をもっているのである。すなわち一つは，ギリシア人が地中海を支配した時のあの異教的な態度と形象においてである。今一つは，それに劣らず，彼等が東方一帯に広がり，キリスト教の大きな変革に形式を与えた時の，あの東方の精神と深く融合した態度と形象においてである。——ローマ人は，エトルリア文化の陰に隠れて成長し，成熟した時には，ギリシア精神によってその究極の思想をほとんど先取りされてしまってはいたが，それにもかゝわらず，彼等が独特の文化的，特に造形的，形成力をもっていたことは，疑いの余地のないところである。しかし世界史的に見ると，ローマ人が文化の面で重要な意味をもっているのは，何よりも次の二つの点である。第一は，ローマ人が統一的な世界帝国を築き上げた，ということである。

そこでは次の時代の異教的なギリシア人の活動が守られたばかりではない。そこではまたギリシア人によって遂行された東西の融合，すなわちキリスト教的古代も，その拡大の場を見出し，その組織を完成させることが出来た。こうしてローマ人は，第二段階の第二次文化——西洋，イスラム及び，ビザンチンによって豊かに結実するロシア——に対して，その外的な地理的基盤と，その内的な文化的基盤とを築いたのである。その際彼等は——これが第二の世界史的に重要な点であるが——制度上の，つまり今日まで存続している法律上並びに政治上の根本的な形式と土台をも提供した。そしてこれこそ古代ローマの固有の偉業であった。

我々が地中海古代の文化的偉業をこのような観点から眺めるならば，その歴史は次の五つの時期に分けられるであろう。地中海古代の歴史は，先ず，紀元前3000年から1200年頃までのいわゆる＜前史＞にはじまる。この時期は，我々が地中海において文化に，しかも東方からもたらされたあの高度文化に出会う時期である。もっともこれらの文化は，記録という生き生きとした伝統によってではなく，たゞ無言の証拠を通して，我々に知られているにすぎない。この期の終りにははやくも，北アルプス方面から，民族移動の波がこれらの文化の上に押し寄せてくる。しかし当時これらの文化はそうした波に対して未だ非常に強力だったので，その態度と本質は新しい担い手の中でも生き続け，彼等の自己形成の土台となった。

この先駆的文化の後には，1100年以降，＜ギリシア人の支配＞する時期がつづく。彼等の支配は，エーゲ海にはじまり，後には地中海のほぼ全域とその周辺の地域にまで及んだ。そしてこの時期こそ，まさしくギリシア的・異教的古代の全盛期であった。アテナイは，自分が地中海の覇権を握ることによって，この時期に明確な組織的形態を与えようとした。しかし400年の直前にこの計画が失敗したために，ギリシアの全盛期は，その政治的基盤が崩壊した。

ギリシア精神は，こうした政治的基盤の崩壊によっても，決して破壊されることはなかった。それは，その後も実に驚くべき経過を辿り，7，80年後にアレクサンドロスが西南アジア的東方を征服すると，その重心を東方に移す。こう

してギリシア精神はこの<第三>の世界史的時期に，東方の古い高度文化の支配者となるのである。一方この頃西方には，ギリシア人よりも大部遅れて，相次ぐ戦争の中で諸制度を制定しそれを揺るぎなきものにしながら，<ローマ人>が抬頭する。ローマ人は，紀元前3世紀の初頭に，イタリアを統一して支配下におく。そしてその直後に西方にある東方の最大の植民地カルタゴと約一世紀にわたって戦いながら，西地中海ばかりではなく，——北アフリカ，スペイン及び南フランスを併合して——アフリカ大陸とヨーロッパ大陸の一部をも支配するに至る。

146年以後，ローマの支配下で，東西の統合が急速に進められる。こうしてヘレニズムの征服によって，偉大な<第四>の時期，<ローマ世界帝国>の時期が開始される。この時期には，東方では，ギリシア人の政治的失脚が決定的なものになると同時に，彼等の第二の世界史的意味をもつべき形式と行為が，直ちに芽生えはじめる。それは，東方の宗教的要素と一層深く融合し，それを自家薬籠中のものにする，ということである。西方ではギリシア人の第一の形式が，なお勢力を保ちながら前進し，ローマ帝国の文化に対してその最も重要な土台をなしているのに対して，東方ではこのようにして，この第四期の初頭から，すでに後のキリスト教的古代の本質的な形式が現われているのである。このキリスト教的古代は，遂に一切のものを変革する。そしてそれは，ローマ人の世界帝国を全面的に征服し，<第五期>，すなわち最終期のすばらしい，またこの上もなく複雑な成果を見せるのである。

以上が地中海古代の枠組である。我々はこの枠組を埋めることにしよう。そしてそこにはめ込まれた文化的偉業を説明することにしよう。この偉業は，非常にまとまった外観を呈していながら，しかも二律背反的な二重性と多様性を内包している点において，歴史上どこにも類例のないものである。

II. 異教的ギリシア人

1. 先駆的文化，ギリシア人の到来，ギリシア人の発展

ギリシア人は，歴史に登場した時，地中海をめざして移動していた他のすべ

ての北方民族と同様に，農耕の知識のある騎馬民族であった。ギリシア人は，いくつかの集団に分れて，最後はおそらくイリリアとその奥地にあるドナウ地方から移住してきたものと思われるが，その際彼等は，どの集団においても，貴族政治的な色彩をもつ氏族制社会を構成していた。2000年頃ギリシア人はペラスゴイの上に侵入した。彼等がペラスゴイと呼んだのは，バルカン半島に居住していた，ゲルマン民族以前の古い母権制的な先住民のことである。しかし，既に述べたように，ギリシア人は同時に，あの古い東方的なエーゲ高度文化の真直中にまで突き進んだ。エーゲ高度文化は，エジプトに近いクレタ島を第一の中心地とし，少し文化的色合いの違うトロヤを第二の中心地としていた。トロヤが発展し重要な意味を持っていたことは，それが，当時開けていた東方から未だ野蛮な西方への文物の移入を仲介するという，いつの時代にも重要な地点に位置していたことから，容易に理解しうるであろう。第一の中心地クレタ島は，バルカン半島を通りエーゲ海にまで南下してきたアカイア人にとって，文化の面で決定的な意味をもった(1)。クレタ島は長い間島国として孤立していたために，そこには日本人のようにこじんまりした民族が生れていたが，彼等は，既にエジプトの古王朝の時代から，たえずその地と交流して，高度な文化を発展させていた。彼等はまた，その地理上の位置とそこから生じる仲介者としての可能性によって，エーゲ海において，また西方に対して，特別の地位を獲得していた。それは，おそらく長い間強力であったと思われる海洋王国の中心地，母島に無防備の大きな支配の拠点をおきながら，遂にエーゲ海とその沿岸を公然と支配するに至った，あの海上支配者としての地位であった。クレタ島自体の中心地は，財宝と贅沢な品々にあふれ，また高度の文化的，とりわけ造形的技能の見られる支配区域であった。しかし，この偉大な根源的エーゲ文化が生み出した祭儀用のあるいはその他の造形美術品が，多くの場合，いかにロココ風の洗練された感じを与えるにしても，エーゲ文化そのものは，その高度な水準にもかかわらず，内的本質においては，この文化がかつてそこから生れたに相違ない，その母権制的な根底と根本的に何ら異なってはいなかったのである。すなわち，原始人のように祭儀的な踊りをおどって崇められた

女神たち，並びに，その前では特に闘牛を意味する祭儀的な劇が演じられた豊穣をもたらす女神たち，この二種類の女神たちがエーゲ文化の霊的・精神的核心を成していた。また石や木や動物に対する原始的な崇拝も，この文化の本質的な部分を形成していた。

後にアカイア人と自称する最初のギリシア人が，いつ，またどのような方法でエーゲ文化と接触するようになったにせよ，この疑いもなく全く別の＜男性的＞本質をもったギリシア人は，1600年頃勢力を増大すると，エーゲ文化の本拠地を破壊してこの文化の中心地を自分たちの半島に移すことに成功した。今やギリシア人は，この半島からエーゲ海に向けて，支配権を確立するに至った。我々は今日，ミケーネ，ティリンス，オルコメノス等の発掘によって，その遺物を目のあたりにすることが出来る。このミケーネ=アカイア人の支配は，1400年頃から1200年にかけて，真の大帝国，しかも東洋風に組織された真の大帝国を樹立していたものと推定される。この大帝国は，1260年頃勢力の衰退していたエジプトに侵入し，また同じ頃古い先駆的文化の第二中心地を破壊するほど，強力であった。そしてこの第二中心地を破壊することによって，後の氏族たちの記憶しているあのトロヤ戦争を引き起こしたのであった。

こうしたすべての事柄にもかゝわらず，地中海にはじめてギリシア人の支配を樹立したこのミケーネ＝アカイア人は，文化の面では，なお，先駆的文化によって吸収され，それによって形成されていた。それは，精神的な自己主張をするには，彼等の数があまりに少なすぎたためかも知れない。あるいは他に決定的な理由があったのかも知れない。いずれにせよ，上の状況に変りはなかった。ミケーネ文化の残した証拠品が，さまざまなニュアンスの点で，また特に人物の容姿の表現において，固有の性質を示していることはたしかである。ここにはまた，後のギリシア人の住居と建物の土台となる，長方形のメガロンも現われている。しかしミケーネ文化の本質的内容——それは常に祭儀の中に現われる——と，技法並びに様式は，全くエーゲ風ないしクレタ風であった。彼等の生活の組織形態も——その建造物の構造と性質が示しているように——明らかに東方風に，つまり民衆の不自由の上に築かれていた。

世界史的なギリシア民族は，次の時代からはじまる。すなわちドーリア人の南下と総称される，北方のギリシア民族の移住からはじまる。このドーリア人の南下によって，先駆的な精神文化ばかりではなく，一種の大王国として，古代東方にならって形成されたミケーネの社会秩序も，破壊された。その結果，当初は，野蛮状態に逆戻りしたような現象が生じた。この後退現象は，かなりこじつけではあるが，ゲルマン民族の移動後のそれとしばしば比較される。ともあれこの逆戻りが，本来のギリシア民族の歴史的出発点となった。

このようなわけで，ギリシア民族は彼等の本性を持ちつづける。彼等は，二つの段階を経て発展するが，その間に空間を征服し，また彼等に適した生活形態を成立させた。この生活形態に基づいて，ギリシア民族はその最初の文化的世界伝道を為し遂げたのである。

1100年から750年に至る時期に，ギリシア民族は矢継ばやに，先駆的文化の全域，ギリシア本土，周辺諸島及び小アジアの沿岸を支配下におさめた。彼等は，ミケーネの古い偉大な形成物を破壊して文化を後退させたこの時期に，疑いもなく実に様々な形で，各地に，相互に競い合う小さな城国を形成する。そしてこの城国の，外敵を防いだり避難したりする場所の周辺には，氏族と共同体の自由な農民とが，かなり緩やかな組織体を作っていた。このような形態は，外部からの危険があまり差し迫っていない半島において主に見られるものであった。ギリシア民族はまた，堅固な，都市に似た建造物の内に集合し，以後，氏族と農業に従事する必要のないすべての人々が，その中で生活した。これは，たえず東方からの脅威に曝されて用心していた，小アジアの沿岸地域に一般に見られる形態であった。いずれにしても，ギリシア人がその後もずっとポリスないし<都市国家>という名前で理解したもの，彼等の外的並びに内的生活組織として，また彼等の精神的創造の重要な基盤として，その後の全歴史を通じて，彼等が固く守り通したもの，政治的並びに軍事的絆であったばかりではなく，生活全体を包括する宗教的絆でもあったもの，この<都市国家>が，この時期の終りにようやく成立したのである。もっともそれがどこにでも成立したというわけではない。スパルタ人はずっと村落で生活した。つまり彼等は，

常に出陣体制の整っている陣営，スパルタを取り巻くいくつかの村落で生活した。そして社会的には，国有奴隷となった先住民やその他の被征服民と，厳然と区別されていた。

しかしポリスがギリシア民族の典型的な生活組織として成立して以来——それが諸氏族の意識的な集住(シュノイキスモス)によるものであれ，他の形式によるものであれ，あるいはどんな理由によるものであれ，ここでは問題ではない。おそらく実に様々な理由が，とりわけ軍事的な理由があったのであろう——ともあれこの時以来，ギリシア民族は<優れた>生活形式を持つことになった。この生活形式によって，ギリシア民族は領土の獲得と生の形成の第二段階に入ることが出来た。すなわちあの極めて注目すべき，拡大と発展の段階に入ることが出来た。

この若い，力の漲った民族は，人口過剰であった。この人口過剰による圧力が，彼等の第二次発展の方法と規模に大きく作用したことは確かである。彼等の居住地は，ギリシア本土であれエーゲ海であれ，なるほど景観はすばらしいが，肥沃な土地はほんの僅かしかない地域ばかりだったから。アッティカ全体でも，まあまあ肥沃だと言える土地は，2500平方キロメートルにすぎなかった。

けれども，ポリスという新たに獲得された生活単位とその極めて特殊な性質を抜きにしては，次の出来事のような，まさに爆発的な拡大の方法と規模とを理解することは，とうてい不可能であろう。すなわち，ギリシア人は，750 年から7世紀を経て600年すぎに至る時期に，エーゲ海とギリシア本土を拠点にしながら，彼等の支配の及ぶ地中海の全域を，このポリスという形式のギリシア的な生活体(レーベンスケルパー)で飾ったのである。その結果ギリシア人は，北アフリカの西岸と西シシリーを所有していたカルタゴ人と，またちょうどその頃イタリアの北西部及び中部でさかんに活動していたエトルリア人と競って——もっとも両者とも，少くとも海上貿易の点では，既にギリシア人に圧倒されていたのだが——600 年頃には，地中海のほぼ全域を支配下におさめるに至った。それは，合衆国の三分の一ないし半分に相当する地域であった。しかも気候，地形，景観等の点で，地球上に類のない広大な空間であった。この空間へギリシア本国はい

わば手を伸ばして，そこにはりめぐらされている糸をたぐり寄せたのである。

ギリシア民族が以前はどんな民族であったにせよ，今や彼等は，優越感をもった，またこの種のものとしては歴史上に未だその例を見ないような＜支配者民族＞となった。彼等の優越感と比較しうるのは，たゞインド征服後のアーリア人のそれだけであろう。ギリシア人が植民地を作って定住したところではどこでも——すなわち黒海沿岸のヘラクレアとトラベズス，はるか西のマッシリアとバルセロナ，南のキュレネ，南東のキプロス，クマエ以南のイタリア，シシリー島の東岸一帯，コルキュラ，その北方のアドリア地方などであるが——この今や自分たちのものとなった＜王国＞の全域で，ギリシア人がかなりの程度まで，商業を生業としていたことはたしかである。彼等は，奥地から農産物やその他の原料を輸出し，代りにそこへ工業品を輸入した。それらの工業品は，当時は特に本国の被征服民（メトイコイ，ペリオイコイ）によって製造されていた。しかしギリシア人は，疑いもなくそれ以上に，彼等の移住地の周辺に住む部族たちの農業生産の発展によって生活していた。その結果，植民地の周辺地域の生産高が増大すればするほど，ますます多くの富がギリシア人の手に蓄積された。それ故こうした富は，草本に富むギリシア本土と，当時は未だ肥沃であったシシリー島において，最も大量に蓄積された。事実これらの地域には，ギリシアの最も大規模な記念建造物が見出されるのである。

いずれにしても極めて特殊な地位に就いたこのギリシア民族は，歴史上はじめて，奴隷という底層の上に彼等の生活を築いた。言い換えれば，物とみなされた人的資源の上に彼等の生活を築いたのである。従ってギリシア民族は，彼等の行った侵略，彼等の着手した征服，また彼等が相互に戦った際の残酷さなどにおいて，その支配者的特徴を明確に示すこととなった。この人的資源の数は，たしかに非常にまちまちであった。アテナイの全盛期には，この都市に，15万人の奴隷以外の住民（アテナイ人とメトイコイ）に対して，10万人もの奴隷がいたと推定される。他の都市では，その数はもっと少なかったであろう。しかしどこにおいても，奴隷は，物体化された人間から成る，確固とした不可欠の社会的基盤を成していた。この生活形式を継承したローマと，南北戦争以前の南

米諸州を除けば，一民族の地位がこのように物体化された人的資源の上に築かれるということは，二度と起こらなかった。なぜなら未開人の場合にも奴隷の身分は存在したし，今日でもあらゆる奴隷禁止令にもかゝわらずそれは存在するが，それらは一般的な生活構造の不可欠の構成要素ではなかったし，現在でもそうではないからである。またそのようなものとしての奴隷は，東洋のどこにも見出されなかったのである。——そしてギリシア人が古代ギリシア人である限り，この生存の社会的基盤は，ギリシアでは，決して非難されることがなかった。古典期の哲学者の誰一人として，また後期に属し，あらゆる社会制度を批判的に吟味したアリストテレスさえも，周知のように，この基盤は非難しなかったのである。

我々はこの支配者的地位から出発しなければならない。我々は，西洋文明の最初の担い手としてこのような地位にあるギリシア民族が，ユダヤ民族とは対照的である点に注意しなければならない。なぜならユダヤ民族は，破壊の中から，いな奴隷と化した状態の中から，その世界史的な偉業を為し遂げたからである。この両者の対照に注意した時にのみ，ギリシア民族の固有の性質を理解することが可能になる。また，ギリシア民族がこの支配者的地位を常に彼等の生存の自明の構成要素とみなしていたこと，しかもこの支配者的地位が地中海全域に及んでいた時であれ，後にその重心を東方に移した時であれ，その点は少しも変らなかったこと，こうしたことを念頭においた時にのみ，彼等の固有の性質を理解することが出来るのである。ギリシア人は，政治的な支配力を失って，高貴なギリシア人から品格を失ったギリシア人，グラエクリになりさがるまで，ずっとこの支配者的立場を守りつづけた。

2. ギリシア人の天分と偉業

従ってギリシア人の土台は例外的なものであった。その上ギリシア人は何とすばらしい民族であったことか。彼等がこの土台の上に築き上げた業績は，その内容といいその性質といい，何と前代未聞のものであったことか。

ギリシア人は，その分散的な形態を廃止したり，——偶然そうなったわけで

はないが——あの相争う小国に分裂している状態から抜け出すことが，不可能であった，いなむしろそうすることを望まなかった。従ってギリシア人は，人種と言語が共通である点を除けば，ほとんど祭儀的な要素だけで結合している民族であった。言い換えれば，彼等の最も重要な神々の祭儀をめぐって，一つにまとまっている民族であった。彼等は，こうした神々のために共同の組織をもち，こうした神々を認知していることこそ，自分たちにふさわしい本来の結合形式であると考えた。それ故彼等はこの結合形式をはじめは宗教連合と言い表わした。ギリシア人の場合は，この他に，ポリスにおいて形成された諸々の生活習慣が，彼等の最も強力な接着剤になっている。これもまた，実生活の祭儀的要素のまわりに蓄積された結合剤である。従ってギリシア人が，最高神に奉納する合同の競技を開始した日を彼等の共通の歴史の出発点とみなし，歴史の経過を競技に従って数えているのは，全く理にかなったことである。彼等はオリュンピア紀に従って計算した。ギリシア人はさらに，次のような事柄によっても結合されていた。すなわち，政治の面ではそう簡単に主張しえないが，精神の面では，彼等が存在する限り，あの広大な領域に並びなき支配を布いたこと，そのことに対する優越感，他の諸民族と比較して類まれな天分に恵まれていたことなどである。

それは，偉大な個々人の天分を豊かに内包する，一つの全体としての天分であった。個々人は，彼等を高みへ運んでくれる波の山の上に休らうように，この全体としての天分の上に休らっていた。そこには実に広大な感情が存在する。その領域は，一切の存在に対する明確で広大無辺な肯定から，全体的色調の微妙な変化を経て，生の否定と，既にはやくから彼等の生活態度のスペクトルの中に現われていた，あの禁欲にまで及んでいる。このように感情の領域が広かったので，この民族は，世界を肯定している時でも，他の民族とは違って，人間存在のもろさ，その不確かさを感じ取る能力を授かっていた。従ってニーチエが感情のペシミスティックな底流をギリシア人に帰しているのは，正しいと言えよう(2)。しかしギリシア人は，この底流に橋を架け，その上に自分たちの作った，数えきれないほど沢山の形成物を並べることが出来た。これらの形

成物は二つの考えを内包している。一つは，生れてこなかった方がよいというものであり，今一つは，やはり人間ほど強い者はないというものである。ギリシア人の心の中では，人間が現実を把握する際の様々な可能性が，類まれな方法で，一つに結合されていたのである。——現実把握の様々な可能性は，想像力によって捉えられた。彼等の想像力の豊かさと多様さに比肩しうるのは，インド人のそれだけであろう。しかしギリシア人の想像力は，インド人の場合とは対照的に，次のような能力を伴っている。それは，次々に湧き出して迫ってくる多数の表象を常に洗練された形象の中に封じ込め，最も深い体験を明確な具象性の中へ，厳密で簡潔な表現形式の中へひきあげる能力である。想像力とこうした能力を兼ね備えているだけでもすばらしいのに，ギリシア人はさらに，物事を極めて冷静に見る能力，際立った合理性の能力を持っている。ギリシア人は後に，碁盤の目のような整然とした都市を建設した人を，彼等の精神的英雄の一人に数えているのだから。これらすべてのことのほかに，ギリシア人は豊かな感情と情熱に恵まれていた。この豊かな感情と情熱は，ギリシア人の形成能力に実に様々な素材を提供しながら，この民族を，最も野蛮なものから洗練されたものに至るまでの人間のあらゆる感受性を備えた，万能の器械にしたのである。従ってギリシアは，これまでどこにもその例を見ないような，豊かな天分に恵まれた民族であった。

ギリシア人はどのようにしてこの天分を大いに発展させて，信じ難いほどの偉業を為し遂げるに至ったのか，こう我々は問わなければならない。その信じ難いほどの偉業とは，ギリシア人が，彼等の支配者たるにふさわしい性格から，世界ではじめて＜人間を発見＞したということである。それは，彼等が自ら述べているように，万物の尺度としての人間であった。そして人間の発見と同時に，彼等は——このようなことは未だ起こったことがないのだが——偏見のない，思慮深い，そして自然な態度で，人間の内面的法則を問うようになった。その態度に，我々はいつも新たな感動を覚えるのである。またギリシア人はどのようにして，歴史上はじめて神々を完全に擬人化するような運命観をいだくに至ったのか。彼等の運命観に従えば，神は人間の隣人であり，人間と同じ素

材と本質から成り立っている。そして人間よりは大きな力を持っているが，決して絶対的な力を持っているわけではないのである。なぜなら彼等は，神々と自分自身の上方に，何か両者を超えたもの，一度与えられたら決して変更しえないものを見てとり，それを全く自由にまたごく自然に承認しているからである。それはモイラ，テュケ，アナンケ——つまり我々が今日，たいていそれ以上探究せずに，運命とよんでいるものである。ギリシア人にとって運命とは，内面的法則をもった個々人が，どんなものよりも強力で，決して変更しえないということをその徴表とするような一つの全体の中に組み込まれていることを意味した。しかもその際個々人が正当に取扱われたかどうかは一切問わないような仕方で，その中に組み込まれているのである。我々がギリシア人を限りなく高貴だと感ずるのはこの点である。東洋でも，既に述べたように，人々はこうした最高の非人格的なものに服従する。しかしそこでは，支那におけるように，人々は原始的な呪術を通してそうしたものに働きかけようとしている。あるいはインドの場合のように，それを変えようのないものとみてとるや，人々は一定の行為——再生の連鎖から離脱すること——によって，その変えようのないものから，その重圧とそこから生じる様々な苦悩から逃れようとしている。しかし己に課せられた運命を，出口をさがさずに，あえて直視しようとしないならば，ギリシア人はもはやギリシア人ではなくなるであろう。またギリシア人がそうした運命に対して，二度と到達しえないような高みに立つということもなくなるであろう。運命が重くのしかかった時には，君は嘆くがいい。ホメーロスの英雄たちはどんなに嘆いていることか！　どのギリシア悲劇においても——今日ではそんなことをしなくてもいいのに——男性がどんなに嘆いていることか。しかしなぜ君はそういう運命なのか，またそれは正当かどうか——このようなことを尋ねるのは，君にふさわしいことではない。

上述のところは——筆者にもわかっているのだが——そこから具体的なギリシア的態度が実に多種多様な形をとって現われてくる，その霊的核心を確定したものにすぎない。その具体的なギリシア的態度には，死後の消滅を願ったり，精一杯生を楽しんだりする態度と並んで，不死への憧れと禁欲が見出される。

もっとも不死への憧れや禁欲といっても，それらは決して東方のように罪や贖罪の問題と結びついているわけではない。——ともあれ最初の形式に見られるギリシア民族の文化的意義を理解したいと思うならば，この霊的核心から出発してさしつかえないであろう。

このような枠にはめられた人間の発見，これこそギリシア人の表現形式の意味と性質とを理解するための土台である。ギリシア人の表現形式とは，形象に形而上学的な意味を持たせ，形象の中に神的なものを具現しようとするものである。人間は，彼が表現している個別的な具体性の中に，普遍的な法則を＜響き渡＞らせ，それを目に見えるようにすることによってのみ，彼の内的な形成法則を得ることが出来る。言い換えれば，彼は，普遍的なものを代表する明白な象徴となることによってのみ，内的な形成法則を得ることが出来るのである。この意味において，すべてのギリシア的なものは，象徴的性格を持っている。この象徴的性格は様々な意味に解釈しうるが，ここではそのいずれであっても構わないのである。すなわち，これを元の意味を損わずに，代表的な個物が上位にある普遍的なものをいわば目の前にある対象のように生き生きと具現すること，と古典的に解釈することも出来よう。あるいはプラトンのように，この象徴的性格を超越的世界の模写と理解することも出来よう。また更に時代に下ると，プロティノスのように，ギリシア人の最後の宗教的・哲学的形式に傾斜させながら，これを絶対的な一者の流出現象と捉える見方も現われてくる。いずれにしてもギリシア人の生み出すすべてのものは，このようにして象徴的になり，またその意味において，究極的な絶対性を求めるようになるのである。ギリシア的国家，ポリスは象徴的である。ポリスは，当時容認された形式においてのみ，全体を分節化し，そうした全体を宇宙的全体の中にはめこむ正しい試みである。このような分節化を寺院において表現している建築術，立像などの彫刻，叙事詩，抒情詩及び悲劇における霊的並びにその他の出来事の再現——こうしたものはすべて象徴的である。すべてのものは，象徴的性格を帯びることによって，その特徴を得，その形式を得ているのである。指導的人間や彼の実物そっくりの肖像は，象徴的性格を持ってくる。我々があの有名な胸像にみるペリクレス

は，決して単なる個人ではなく，彼と当時のアテナイの政治的並びに精神的高みが 揮然一体を成すものである。にせの代表者は徹底的に排除される。それがオストラキスモスである。ギリシア的思惟さえ，その固有の大きな知的発展にもかゝわらず，それが神話的な象徴性を脱ぎすてた後，その最後の高揚期に——それは運命が最も厳しい時期の一つでもあった——再び，これまでとはかなり違った仕方で象徴的になり，その後もずっとその傾向が続いている。

だからこそこの民族は，あの古典的な形式を生み出すことが出来たのである。そこでは肉体美が，それ自身において完結し，それ自身の中で安らっている，一つの全き表現にまで高められている。ギリシア人によってはっきりと見出されたこの造形美術上の形式は，西洋全体を絶えず魅了したばかりではなく，時として支那までも魅了した。我々は今日はじめて，このような表現形式を，古着のようにかなぐり捨てようとしているように思われる。それについては後によく考えてみる必要があろう。しかし今日でも，言語の世界において人間的なものを文学的に再現しようとする時には，その普遍的な象徴的・古典的形式を求めて，人々はギリシア的なものを基準にするのである。そして西半球の精神的な構成理念は，つまり哲学であれ，宗教であれ，キリスト教的なものであれ，非キリスト教的なものであれ，こうしたものの構成理念は，悉くギリシア的なものに由来している。また西洋的思惟の素材は時代が下るにつれて増大するが，それらの豊富な素材も，ギリシア人によって自覚された形式の中にはめこまれた。数学は，ギリシア人にとって，世界の合理的な解釈というよりは，むしろ世界の内的な調和の法則を意味したが，ギリシア人の数学は，正しくこの意味において，後々までも西洋の時代を支配した。ギリシア的知識の集大成者アリストテレスが，知識を収集し整理するために設けたあの論理的カテゴリーは，今日まで残っている。これらはすべて，普遍性を委託された個物，つまり象徴化されたもの，を形成し，それを使いこなしているという意味に理解された，ギリシアの古典である。

しかし，こうしたいっさいがギリシア人のもたらした永遠に通用する内容であっても，もし我々が次のような態度を取るならば，それは誤りであろう。すな

わち，ギリシア人はこの内容において，我々が自分自身の中に見出し，彼等の助けをかりて目覚めさせることの出来るあの永遠に人間的なものを発見したのであるから，もし我々があの時代に生れ変ったら，彼等と同化出来るだろうと考えることである。実際実に多くのヨーロッパ人が誤ってそう考えたのであるが。そしてギリシア人の本質は，その非常な親しみやすさにもかゝわらず，同時に我々とは何か非常にかけ離れた，異質なものであることに思い至らないことである。ギリシア人の本質は，実際には，非常に異質なものであった。昔の市場に身を移されて，周りに群がる人々の振る舞い，談話及び存在そのものに取り囲まれた時に，どんなに孤独な思いをするか，どんなに違和感を感じるかが分らない人は，みな劣悪な＜ギリシア人＞だと言わなければならない。ギリシア人の生活には，今日の家族の雰囲気が欠けていたこと，そして多くの点で家族的雰囲気の代りに少年愛がすべてのものに浸透していたこと——プラトンのほとんどすべての対話は，少年愛によって貫かれ，それに絡まれている——この二点をことさら強調しなくても，そこから次のことが明らかになる。すなわち我々は今日男性的文化について語り，騎士らしさや戦闘について語るけれども，ギリシア人の男らしさはこれらすべてよりも徹底していたということである。そしてその類例は，程度は違うが，又してもインドのアーリア人に見出されるにすぎない。ギリシア人の男らしさは，はるかに排他的であった。たしかにギリシア人は実に多種多様な生を感受し，ほかならぬ女性の美しさと魅力についても深い知識を持っていた。また言うまでもなく，女性の完璧な美しさを描写し再現する点にかけては決して凌賀されることはなかったし，ある種の一般的な運命的状況に対しては，女性の問題的な本性とでも呼ぶべきものさえ見抜いていた。しかしそれ以外の究極的な人生問題においては，女性と何のかゝわりもなかったし，女性と対等に結び付くこともなかった。ギリシア的本質は，こうした内面的な結び付きを欠いたまゝ，完全性を表わす諸々の表象を生み出している。ギリシア的本質は，自らの文化として，女性への精神的なつながりのない，男性の強さと崇高さの文化を創造している。男性のための男性，これが正しい歴史的表題である。そしてギリシア民族の本質が，その最も深いとこ

ろでは，この表題で定められていることを知らなければ，彼等の本質を理解することは出来ないであろう。彼等の本質がこのような表題で定められているところから，その霊的基盤が男性と女性によって担われている現代の世界との決定的な相違が生じてくるのである。またこのことから，非常な親しみやすさ，全く飾りのない態度，幾多の古典的作品，人間の知りうる最も高貴で最も深遠なものを発見しそれを表現していること，その業績の永遠の内容がかもし出す崇高さ——こうしたすべての事柄にもかゝわらず，ギリシア的世界が橋わたしの出来ないものになっているのである。

このような境界修正をした後にはじめて我々は，ギリシア人がどのようにしてこのような高みに到達したか，またそれはどのような社会学的状況の下で行われたのか，を問うことが出来る。

3. ホメーロスの時代

ギリシア人は，既に述べたように，ドーリア人の南下以来，今やその社会構造が破壊されたとはいえ，東方の影響を受けて高度に文明化された地域に侵入した。彼等は，小アジアに移住した際に，根源的文化そのものと密接に接触することとなった。こうしていわゆる第二次文化・状況が成立するが，この状況はイスラエル人の場合と幾分類似しているように思われる。イスラエル人も同じく騎馬民族であり，ちょうどその頃東方から移住してきたのであった。イスラエル人も，精神的に固有の生存が大きな危機にさらされた時期があった。しかし彼等は，契約に基いて非常に固く結束していたために，またその極めて特異な外的運命のために，異国の精神的勢力に屈伏せずにすんだ。ギリシア人は，一人の厳格な神に縛られることもなく，自由にやってきた。たしかにギリシア人も，先行するアカイア人と同様に，彼等の神々を持ち，生活を緩やかに包む彼等の呪術を持ってはいた。しかし文化の面では，彼等が移住地に見出したものと融合することを禁じるものは何もなかった。けれどもギリシア人は，彼等がやってきた時のように，大勢で結束して——彼等がそうしてやってきたに違いないことは，まもなく小アジアにまで進出したことからも窺える——これまで

通りの社会生活を続けた。すなわち，城国においても後に都市の形態をとっても，ホメーロスに見られるように，共同体の自由な農民層，貴族階級，そしてこの地方に君臨する王権という形で，彼等の生活をそのまま継続した。しかしそれだけには留まらなかった。さらに重要なことは，こうした生活形式が保たれたために，彼等の精神的に固有の霊的本性が異国の本質に移行しなかったということである。但しギリシア人が，前の時代——それは，社会，政治及び精神の面では，彼等によって徹底的な破壊されてしまったのだが——その前の時代の技術的・文明的要素を取り入れ，東方からも数千年にわたって蓄積された豊富な知識を受容したことは言うまでもない。彼等はまた，東方で発達した意識の浄化ということからも影響されずにはいなかった。『イーリアス』のプリアモスの態度，ヘレネーの登場する有名な城壁の場に最もよく現われているあの崇高で虔しみ深い態度，ここには東方の長い歴史の影響が看取される。それは，洗練された，意識の浄化と訓練であって，アカイア人には未だ見出しえないものである。アキレウスのことを考えてみよ，またパトロクロスの葬送の際の王や君侯たちの激しい競技のことを想い浮べてみよ。

ギリシア人は，このように自由にためらわずに，しかも自分自身を失うことなく，近隣の数千年にわたる精神的遺産を魂の中に吸収し，そこで消化することになっていたが，このギリシア人自身は，未だ若く，青年期の活力に包まれた初々しい魂を持っていた。そして自然の神秘的な威力，その威力との原始的な結合，運命などから未だ脱却してはいなかった。運命は，自明の共同体——つまり共同体は解明もされず問われもしない永続的なものであって，個々人はその中に完全に組み込まれていたのだが——その共同体のように，偉大な個々人を包み込んでいた。

非常に豊かではあるが，内面的な自由という点ではこのように制約されている民族の，この初々しい魂と，世界最古の文明に見られる，あの明澄で高貴で深遠な意識，この両者の対決こそ，最初の，真のギリシア民族の時代を開いた固有の歴史的社会学的状況である。

このような歴史的・社会学的状況から，絶えず接触電流が流れて点火するよ

うに，驚くべき天才ホメーロスが生れる。言い換えれば，一点の曇りもなく，明確に形作られ，ぼんやりした暗がりから日の光の中へ高められた豊かな神話という形で，ギリシア人の意識が誕生するのである。この神話は，若さとすでに雄々しく完成した状態，あるいは成長期とすでに完全な円熟の域に達した時期，この二つをあの独特の方法で融合して，ギリシア人に彼等の神々を提供する。神々と共に，ギリシア的運命観の原形を，そしてその原形の中で，さらにその土台となる行為を提供する。それは，明確に自覚された，しかも純粋な自然として理解された，人間の発見である。

純粋な自然として！　これは，上述のように，言うまでもなく一切を包括する運命の中に，人間も，また運命に従属する神々も組み込まれていて，こうしたことが意識が現われているにもかゝわらず打破されていないという関連においては，次のことを意味している。すなわち人間は自由であり，自己の法則に従って形成され，それに従って行動するが，しかし常にモイラに呪縛されているということである。この場合の人間とは——社会学的にみれば，その他ではあり得ないのだが——この種の人間につきものの悲劇的性格を帯びた支配者的人間をさすのである。

従ってホメーロスの詩と彼の世界においては，貴族としての人間が発見される。あるいはより正確に言えば，人間の中の貴族的側面が発見されるのである。そしてこの支配者民族は，立派にこの仕事を為し遂げ，精神的に捉えられた貴族階級という形で，その最初の象徴を，人間についての象徴を世に送る。このことによって彼等は同時に，自由でありながらしかも束縛されているというこの人間把握を，その古典的な本質に従って，永久に固定化し，これを，はじめて見出されたあの円熟し完結した表現の中に，永続的に結晶させる。以後，貴族の出であろうとそうでなかろうと，すべてのギリシア人につねにこの尺度が用される。つまり，その最高の形態においては，英雄的人間の尺度である適べきものが，すべてのギリシア人に適用される。ホメーロスの時代の後に，英雄神話と英雄詩の時代が続いたように。そしてギリシア人は，その支配者的な生活体が破壊されない限り，決してこれ以外の価値の尺度を知らなかった。

人間とその隣の神々の世界の発見に伴って，第二の現象が生じる。それは，今や自然が神人のような形象で一杯になる，ということである。実に豊富なギリシア神話が成立する。神話は，ギリシア人の豊かな想像力によって，たゞ存在するだけのものに，神的な，あるいは神に類似した人間の姿とその運命とを委託する。神話は，彼等の存在をとりまく偉大な諸力，太陽，月，星などを人間の姿に変え，人間の活動力で満たすばかりではない。こうしたことは，未開人の想像力も，未だ宇宙発生論的・呪術的表象においてではあるが，分裂，生殖，結合，繁殖などの不可思議な行為の威力に対して行っていた。いな，ギリシア人の場合には，彼等の体験する一切の事物に，すべての山，すべての泉，すべての森に，この豊かな想像力が注がれる。すなわちこれらのものにはみな，人間のような姿が委託されるのである。こうして自然は，第二の世界に，人間と究極的には同じか，あるいはいずれにしても人間と非常に近い，血のつながった世界に転換される。このようなことは，本来の神々の世界について既に行われていることであった。神々の世界もはじめは，自然に，その偉大な力と現象に，息吹を与えることから生れたのであるから。

神話はこのように，ギリシア民族にとって，普遍的な世界解釈と世界把握の形式となった。それは呪術的な世界解釈と結び付き，そこから生れてはいるが，呪術的な解釈を大巾に変形し補足している。この世界解釈は，次のような特徴を持っている。すなわちここでは解釈が本物かどうかは，専らその登場人物に帰せられており，真理内容も，それが生き生きとした形象を具えているかどうか，全体として——もしこの言葉を使うならば——正しいかどうかによって，判断されるということである。こうした真理内容は，知的な検証や形式と決して結び付くものではない。同一性や因果性などはどうでもよいのである。ゼウスは<一人>の神でありながら，同時に，独立して存在する様々な形象と機能の中に現われる神でもある。他の神々もみな同様である。物理法則は，この世界にとっては，ギリシア民族の後の最盛期に至るまで，どうでもよいものであった。ここではいつ神々が現われるかも知れない——とつぜん，完全な肉体的姿をとって。また神的なものへの変身ということも起こる。ソフォクレスはな

お，食卓で神をもてなしている。彼自身が神的なものに高められ，その結果彼には祭壇がしつらえられる。いなカエサルさえも——彼は最初のギリシア人からみれば，真に合理化された時代の精神的後裔であるのに——彼がウェヌスの血をひいていることを最大の誇りにしている。

それ故ギリシア神話は，最高の真理と実在の意味に係る，知性を超えた領域である(3)。ギリシア神話は，その真理内容にもかゝわらず，たえず新たに創造し，変形し，補足しうるものである。ギリシア神話のどれ一つとして，キリスト教神話のような意味において，規範となっているものはない。従ってギリシア人が——我々には非常に奇妙に思われるのだが——神々は存在していたのに，ホメーロスや後にはヘシオドスが彼等の神々を創造した，ということが出来たように，アイスキュロスやソフォクレスも，あるいは真理内容を表わす形象を神話的な手法で新たに生み出す人は誰でも，神話を創作して行くことが出来た。——そしてこの民族の豊かな想像力と体験は，たえずそうした形象によって呪縛され，その活動の中に組み込まれることが出来た。従ってその形象が前のものと一致するかどうか，また合理的な意味において正しいかどうかは，決して問われなかった。むしろいつもただ，それが最も深い意味において真であるかどうかだけが問題にされた。知的に捉えられる実在の隣に，それと等価値のもう一つの実在をおいた，あの象徴的性格がそれを決定したのである。

これこそ，ギリシア民族の内面的生活形式を決定している奥義であろう。全世界を把捉し，象徴によって描出するこの第二の存在，それに包まれて今やギリシア民族は歴史に登場するのである。

4. 中 間 期

1100年から750年までの期間に，根本的な事業と形成を為し遂げたこのギリシア民族は，地中海全域への拡大と共に——地中海の沿岸を彼等の都市で飾ったあの時期と共に——文化の面では，諸々の新しい要素の織り込まれた，極めて複雑な時代に入った。この時代は，ペルシア人とカルタゴ人に対する大規模な防御戦によって開かれるあの古典時代——<古典時代の中の古典時代>——

への過渡期にあたる。従ってそれは一種の中間期であるが，その精神的な重要性から見れば，単なる中間期以上のものである。

ポリスは，この期の初めに，祭儀上の同盟になった。ホメーロスの時代にはどの都市も，一つの閉じた生活空間にすぎなかった。そしてその生活空間は，防備されていようといなかろうと，統治と支配によって，またとりわけ貴族的な色彩をもった社交によって，結合されていた。『オデュッセイアー』のパイエーケス族の都市を想い浮べてみよ。ところがこの生活空間が，今や神に仕えその保護を受けることになる。それと共に，神によって祭儀上の組織体にまとめられ，更にこのことによって，生活空間自体のどんどん拡大して行く諸機能に仕えることになる。こうしてギリシア民族を最も強力に結び付けているあの生活習慣が成立する。言い換えれば，一人一人の生き方が，一人一人の男性の生き方が——ギリシア人において重要なのは男性である——家庭での生活よりは，むしろほとんど共同体での生活になっているあの生活習慣が成立する。家庭は，ホメーロスにおいては，疑いもなくもっと大きな存在価値をもっていたのだが。ギリシア人は，もし彼が完全な市民であるならば，ギュムナシオンから青年期を経て共同体の活動に至るまで，一貫してこうした生活習慣によって導かれる。その共同体の活動は，ほとんどすべての生活を呑み込んでいる行動の中心地アゴラにおいて，あるいはその周辺において行われた。裕福な人々，つまり氏族たちが，今や共同体のために負担せねばならない諸々の仕事に支えられて，神々のための祝祭や体操並びに演技の競技会が生れ，それと共にオリュンピア祭やイストモス祭などの大規模な祭儀上の同盟が成立する。やがて共通の神に奉納される体操競技会が，ギリシア民族の一つの最も強力な絆となる。こうしてまず第一に家長や職業的な専門家であるよりは，むしろほとんど一日中共同体の活発な要求に奉仕する人，このような生活形態においては個人の反対，つまり仲間であるような歴史的ギリシア人が形造られる。これは基本的なことである。なぜなら，この時代まで残っていた古い氏族連合が，こうした生活形態の一つの淵源になっていようといなかろうと，ともかく大きな政治的共同体における包括的な生活形式として，上述のことは，自由と束縛とを意識して

いるギリシア人を，独特の方法で祭儀にとり込みながら，いわゆるノモス・アグラフォス(4)に従わせる新しい事象であるから。ノモス・アグラフォスとは，ギリシア人自身の成文化されていない法律であると同時に，ポリスの，つまりギリシア人の政治的故郷であるばかりでなく，彼の歩みの一つ一つを暗黙の中に規定している共同体の，法律でもあった。

従って社会の二つの構成要素が，ギリシア世界では，決定的な構成要素にはならなかったし，またそもそも構成要素になることさえなかった。そしてローマも，ニュアンスは異なるが，後にこの内的秩序を模倣するので，古代地中海圏には，そうした要素が存在しなかったと言えよう。その二つの要素とは，共同であるいは別々に，これまでのすべての文化を支配し形成してきたものである。すなわち一つは支配し統治する官僚であり，今一つは生活を上方から独特の力で規定する僧侶階級である。例えば根源的文化においては呪術に精通している文書階級，支那の場合には高級官吏，インドではカースト制度の下で有能な官僚の代りをするパラモン階級などである。僧侶階級によってのみその最終的な形態に到達したユダヤ民族については，言うまでもないであろう。

ギリシア人の生活空間が——それは何事によらずギリシア人を模倣するローマ人の生活空間でもあるのだが——つまり，本質的にものを組織する力を持っている海が，それを越えて発展する大きな生活形態に対して，このような反官僚的ないし反階層的な自治制度と統治制度を比較的容易にしたことは疑いえない。というのは，海の周りに群がり，すべてを規定している生活の中心地ポリスは，いつもはっきりと把握でき，しかも個人的な接触を通して支配しうるような形成物だったからである。——しかしこのような支配形態の形成に決定的に作用したのは，あらゆる生活上並びに政治上の習慣を規定しているあの原則であった。すなわち個々人を仲間として——多くの権利が与えられていようとあまり与えられていなかろうと，ともかく仲間として——全体の中に組み込むこと，言い換えれば，どんな統治形態の下でも一様に，個々人の生存を自治のための活動に吸収すること，これである。

このことが，否，断じてこのことのみが，絶大な影響力をもつ僧侶階級の成

立と官僚の誕生とを妨げたのだと言える。

それは，たしかに，我々が精神的自由と呼ぶものの起源ではない。なぜならそのようなものは，瞑想的自由として，インドにも，また支那にも，哲学的思弁という形で，かなり存在していたからである。しかしそれが政治的自由と呼ばれる一切のものの起源であることは疑いを入れない。政治的自由が，積極的に生活を支配する観念として，はじめてこの時代に，ギリシアのポリスを通して，またそれに倣うローマの都市国家を通して，世に現われたのである。それは，我々がギリシア精神から受け継いだと思っているあの色合いの精神的自由に対して，少くともかなり重要な部分を成している。

しかしギリシア民族の生活単位がこうした極めて重要な仕事を為し遂げている間に，ギリシア民族自身についてみると，その態度に独特の変化が現われる。それは，ホメーロス的・アポローン的なものにディオニュソス的なものが付け加わるという変化であるが，この変化の中からはじめて完全なギリシャ精神が誕生するのである。

それは決して緩慢な変化ではなかった。その変化は，未だ野蛮なトラキアから入ってきたとされるあのオルギアスティックな祭儀が急速に広まったためにひき起こされたものである。狂った婦人たちが，宗教的な霊感にとりつかれて，森や山をかけめぐる。彼女たちは，激しいエクスターゼの中で神と合一することを願う。男性的性格をしっかりと保持していた従来のギリシア的本質が，ディオニュソスのような，ホメーロスの神々には教えられていない新しい神に夢中になって，我を忘れ，我を失ったかに見える。

一体何が起こるのか。——ギリシア民族は，中心的な本国において，またやがてその領土の全域において，古い諸文化と諸民族の本質がしみ出してくるのを体験する。ギリシア民族は，生粋の支配民族として，それらの古い文化と民族の上に雄々しく侵入し，貴族的な形象と表現を生み出し，先の時代にその根本的な態度を確立していたのであった。

ポリスの発展と並行して，あるいはポリスの発展の後に，周知のように，下層民，つまり農民の，自分たちも都市の積極的な構成員に加わろうとする闘争

が起こる。それは，大抵はたえずやってくる種子不足から債務奴隷に転落し，商人やしばしば海賊になった貴族階級によって搾取されたあの農民たちの闘争であった。この闘争は，調停者アイスユムネテス——その最も偉大な例はソロンである——によって一時的に収拾される。しかしこの闘争は，僭主政治という，実際には大衆化を推し進めたあのポリス・独裁君主制の時代を通じて，多くの都市で，農民を多かれ少なかれ同等の権利を持つ者として，市民階級の中に受け入れる結果になった，

それが民主主義になろうと，中途半端な民主主義になろうと，あるいはその他のものになろうと，ともあれ農民という下層民が抬頭し積極的になったことは，ポリス形成の副産物として，新しい社会学的局面を招来し，ホメーロス的なものとは異質な無数の要素をギリシア精神に導入する結果になった。なぜなら農民層は，母権制的な色彩をもった前の時代の諸要素と長い間接触し，それと融合していたからである。こうして不死の信仰も含めた密儀宗教，神との忘我的・神秘的合一を内包するオルフィク教，音楽，歌，合唱——ここから後に悲劇が生れる——等が導入された。重苦しい宇宙発生論ともども，陰鬱な感じの要素ばかりである。ホメーロスばかりではなく，農民であったヘシオドスも，これによって，ギリシア人に彼等の神々を提供した。ディオニュソス信仰の氾濫は，こうした深化の劇的で，最もよく知られた契機にすぎない。

ここに生じたのはギリシア精神の深化であって，ギリシア精神の衰退でもなければ，結局のところその根本的な変革でもない。前の時代にその本質と形式とを確立していたあの男性的なギリシア的知性が，他の生の凝集（レーベンスアグレギールング）から自分自身の中に台頭してきたこの新しいものを，文化を破壊せずにどのように受容したかを見ることは，一箇の立派なドラマである。ギリシア精神は，この時期に，新しい空気を吹き込まれて——もしこう呼びたければ——敬虔になる。そしてこのことがポリスが祭儀的統一体になるための土台である。但しポリスが生活全体を規制するまでに完成するには，その基礎となる社会学的出来事を俟たなければならない。それは，本来のギリシア民族から成る共同体の集合，つまりギリシア民族の各階層が，差別なく成長して，一つの国家的形態を形成す

る，ということである。

しかしその結果は，ギリシア的本質がその巾と奥行とを広げて，一層豊かで完全なものになるということに他ならない。こうしてデルフォイでは，アポローンと並んで，もともとオルギアスティックな性質をもつディオニュソスが，第二の神として祭られる。それと同様にディオニュソスにちなむ歌が生れ，いわゆるディオニュソス讃歌が成立する。そこには，控え目な表現ながら——ピンダロスを考えてみよ——何よりも新たな深い感情が見事に吐露されている。もともと多かれ少なかれ狂騒乱舞しながら恍惚状態に陥るあの予言者たちが現われる。エンペドクレスは，花輪をつけて歩きまわり，自分が永遠に生き続けることを証明するために，ついにエトナ山の火口に身を投じたと言われている。クセノファネスのような神学者や，ピタゴラスのような永遠回帰を告げる途方もない天才が現われる。しかし彼等が貢献しているのは，古い意味におけるギリシア的なものである。すなわち形式に則って，自由に精神的な世界を把捉するということである。そしてギリシア的本質の勝利を象徴するように，換言すれば，ギリシア的本質が下層の力を吸収しながら征服したことを象徴するように，ポリスという今や一切のものを支配している生活組織体の中に，今日まではっきりその姿をとどめている最も持続的なものが誕生する。それは，ポリスと，今やポリスを支配しそれを包括しているあの神的な威力との結合を象徴するもの，すなわち神殿である。神殿の古典的な形式は585年に完成する。そのアポローン的な美しさの中に，神殿は，——はっきりとは表現していないが——祭儀的なもの，根本においては暗く神秘的なものを取り入れている。そして，この点は，そのために周囲の生活から常に完全に遮断されているゴシック様式の教会と同様である。神殿がこうした神秘的なものを内に秘め，まさしくこのことによって都市を——その中にまたその上に立ちながら——それを支配している威力と明確な形で結び付けるそのやり方において，神殿はすでに古典時代の前触れである。その際メトープやフリーズは，なおしばらくの間，悪魔的な力——それは神殿によって征服されて神々しくなっているが——を代弁するであろう。しかしいずれにしても，ギリシアの神殿はみな都市をこのようにアポロー

ン的に包括するものであり，そのようなものとして捉える時にのみ，神殿の究極的な意味を体得することが可能になるのである。

5. 古典主義の時代

古典主義！ 古典主義は，単に新しい技法としてばかりではなく，心霊面の全く新しい全体的特性として，500年以後，啓示のように突如として作品の中に現われてくる。それは，えも言えず生気に満ちたギリシア人の身体を，厳格な，完結した，崇高な姿勢の中に表現しているあの彫刻の分野にまず現われる。今はじまったばかりの初期古典主義の蕾のような繊細さ，また450年以後に達成されるその完成，これらは周知の通りである。どの人物の上にも，あるいはパルテノンのフリーズに描かれた休らうアプロディーテーのように人物を組み合わせたものの上にも，全き完成の調べが漂っている。——こうした完璧なものを表現しているのは，人間の身体である。それは類型と呼ばれる。なぜなら全く完璧なものは，すべて，類型的性質をもっているからである。人間は，動作をしている時のどんな姿勢においても，またその変形においても，描くことができる。事実我々は，人間をこうした様々な姿勢で描くことが<出来た>。しかしそうした姿勢のすべての変形を描き出すことは，とうてい出来るものではない。どんな肖像も単純化され様式化されているように，全身像についても同じことが行われる。ソフォクレスの有名な彫像のポーズは，象徴的な類型論から生れている。従って，ここには単にソフォクレスが描かれているだけではなくて，彼は，こうした形式において，より大きな全体の中に，もはやモイラには支配されていないもののディケーによって支配されている宇宙の中にしかるべき位置を占めている，具体性をおびた一般を代表するものとして描かれているのである。

この時代のもう一つの偉大な文化表出である悲劇についても，全く同じことが言える。悲劇の起源と本質が象徴的な宗教儀式であることは，ニーチェ以来知られているが[5]，しかし悲劇は，その完成した姿においては，やはり一種の代表である。なぜなら悲劇は，もしモイラとディケーが人間の運命を支配して

いるならば，もし人間の運命が英雄的，つまりギリシア的な意味において人間的であるならば，宇宙と共同体——ポリス——の中に包摂されている人間運命の典型的なものを映し出しているからである。このことは，ポリスの市民たちがなぜ劇の審査員になりえたかを解く鍵である。価値評価はただ美的観点だけから行われたのではないと仮定して，間違いないであろう。なぜなら大部分の市民は，決してそのための最良の素質を具えているわけではなかったから。価値評価はむしろ，ここには象徴的な意味において，明証性ないし真理性という価値があるかどうかに従って行われた。こうして力強い悲劇が生れた。その結果，叙事詩や詩的神話の中に伝えられていたあの悲劇的・英雄的態度が一層深化されて，歴史上ここにはじめて登場し以来決して失われることのない人間観と存在解釈が成立するに至った。それによれば，人間は，もし彼が強靱で完結しているならば，彼をとりまき，彼自身の中に働いているあの神的な力と悪魔的な力との闘争の中に投げ込まれている。これらの力は，人間を巻き込んで脅かすが，もし人間がその不屈の精神力で最後まで運命に抵抗し，それによって運命を克服するならば，運命の決定に従って，人間を，人間的に卓越した，すべての人間的なものを具えた偉大さへと高めるのである。悲劇の合唱に表われているように，人間的な共感にあふれ，人間的な共感によって解釈されている出来事——それは英雄の個人的な苦悩を，＜我々＞に共通なものとし，象徴化し，従って人間一般の苦しみを代表するものにしているのであるが——こうした出来事は，単にそれをまたその英雄たちを生み出した偉大な作家たちの所産であるばかりでなく，こうした状況にあった当時の民衆の所産でもあった。

このような状況を，ただ，最初の国際的な脅威にさらされた時に，東と西の双方で勝利を収め，この全盛期に崇高な感情が湧き起こった結果であるとだけ捉えることは，あまりにも月並である。このような感情を生み出しても当然だと思われるような勝利が，これまでにも数多く存在した。だがそれらは決して似たような感情を生み出しはしなかった。むしろ冷静に考察すると，次のことが明らかになる。それは，当時，ギリシア人の生活の内部構造にある変化が生じた，ということである。この変化は，その形式においても地位においても新

しい一つの中心を作り出した。

この中心は，天才的なギリシア民族全体の霊的・精神的力を結集して，共同の事業の成就に向かわせ，しかもそれ自身新しいものであった。

アテナイは，ソロンによって上層と下層が何とか均衡する立法を手に入れた後，またソロン以後の社会的混乱を切り抜けた後——その混乱は僭主政治によって表面的に収拾されたにすぎないが——508 年にいわゆるクレイステネスの立法を獲得した。この立法は，国を，新たに形成されるフェレと，地理的にはバラバラに存在するその下部組織デモスとに合理的に区分しようという考えから出発しているが，それはここではあまり問題ではない。重要なのはむしろ次の点である。すなわち，これらのデモスがその組織化を通じて古い氏族支配を打倒したということである。今やすべてのアテナイ市民がアゴラに集まって，議案の決定に与からなければならなかった。デモスそのものの内部には未だ平等な選挙権が採り入れられておらず，財産による差別が残ってはいたが，ともあれこうしてすべての市民が支配民族になった。このことは，歴史上はじめて一民族の上に，このアテナイ民族の上に，自由で民主的な積極的市民という感情が湧き起こったことを意味した。それは巨大な力をもった共同体の意識であり，同時に支配者の意識であった。なぜならアテナイの民主主義の周知のような発展は，すべて，この民主主義の本質をなす評議会から生れたものに他ならないから。この民主的な評議会によって，当時のギリシア人は彼等の全体的形態を持つことができた。換言すれば，この評議会によって，彼等はこの時はじめて一つの組織体に統一されたのである。民主主義を基盤として，アテナイは，デロス同盟を結び，事実上その覇権を握って，他のギリシア人の同じく支配者的な階層と集団を服従させた，あるいは彼等を統合しようとした。ペリクレスはこの計画をもっぱら最後の帰結まで進めようとした。

そしてそれはかなり成功した。それ故，精神的な模範となったこのギリシア民族の中心は，後のルネッサンス時代のフロレンスのように，ギリシア民族のほとんどすべての活力をひきつけた。アテナイは，あらゆる哲学者，あらゆる芸術家，あらゆる詩人，あらゆる雄弁家の合流地点となった。すべての人々

が，この新しい雰囲気の中で，人生を楽しみ，互に励まし合い，活発に活動するために，ここにやってきた。

この新しい雰囲気の中で，アテナイ人がどのような自意識をもったかは，ペリクレスの弔辞の中にはっきりと読みとることが出来る。その中で，この民族最大の政治家は，山頂から話しかけるように，アテナイ人と他のギリシア人，そして他の諸々の民族に，こう語りかけている。我々は，これまで他のどんな民族も為し得なかったことを為し遂げたのだ。我々は，万人に対する法の前の平等を実現したことによって，全ギリシア民族の学園なのだと。——ペリクレスはこのように語りながら，次のような人々に話しかけていたのである。それは，東西の双方で野蛮人から略奪した全海域を支配していた人々であり，また自分たちの船でこの海域の隅々にまで入って行き，かつてイギリス人が世界中の海で為し得たと同じように振る舞うことの出来た人々であった。このことは，さまざまなギリシア人がアテナイに集まって，独特の形式の＜民族が生成＞されたことを意味した。それはビクビクした態度から解放されることを意味した。彼等は自分たちが最高だという意識を持ったから。またそれは，誇りをもって全体の中に適合することを意味した——しかし常に，すべての偉大なものが危険にさらされ，脅かされていることを意識しながら。これは，彫刻の分野では，古典主義だけが知っている人生観であった。そこでは，あの完璧な身体が，みなそれぞれの姿勢で，英雄的・悲劇的運命の中に立っているという意識を表わしている。この人生観は，言語の分野では，悲劇を生み出した。そこでは，調和的に結合している自由な人間がその全盛期に体験するこうした運命が描き出されている。個人と氏族の運命が生き生きと描き出されている。ギリシア人が運命を悲劇的なものとして見たとしても，そこではもはや，叙事詩のように単なる事件の連続が考えられているわけではない。今や彼等は，人間という意識を持ち人間性に満ちた存在の意味を問い，それに対する様々な，しかしあくまで人間的な雄々しい解答を与えるという水準で，運命を見ているのである。ギリシア人はこうした事柄をよくみきわめて，それを個人的な運命として，完璧な形で表現しているのである。

精神的にも肉体的にも完結した個人が，同時に共同体，自然及び宇宙の中に包摂され組み込まれているという意味において，一民族が全体としてこれほど崇高で貴族的な意識をもったことはない。この啓示のような瞬間が再び繰り返されるようなことはあり得なかった。またこの瞬間がこの民族によって忘れられるようなこともあり得なかった。いな，ギリシア民族全体が，その内容を決して見捨てることが出来なかった。なぜならその内容とは，未だ恣意的にみえるホメーロス時代の英雄たちと彼等の盲目的な運命を，人間によって作られたのではないけれども，人間の意志を貫いて支配しているディケーの中に，規範となるような形で包摂することに他ならなかったから。それは，今日疑わしくなっているような正義の観念の中にではなく，むしろ神も人間も従わねばならない宇宙の理法の中に包摂することに他ならなかった。少くとも二人の最初の偉大な悲劇作家においてはそうであった。従ってニーチェが当時のことをこう述べているのは正しい。すなわち彫刻はギリシア芸術の開花したものであるが，悲劇はギリシア社会の開花したものであると。

しかしこの時期には，同じ理由から，もう一つの現象が生れた。それは，理念と思惟がひき続き形成され，完成し，高度の発展を遂げたということである。その最初の担い手については既にのべた。そしてそれと共にギリシア人——彼等にとっては，形象は彼等の生の把捉の表現であり，形象の崩壊は存在根拠の崩壊を意味したが——そのギリシア人の霊的・心理的なものと知性的なものとが，ともに審査されなければならなくなった。その審査は，ギリシア文化の全盛期にその本質を問わずにはおかなかった。またそれは，一つの文化がその固有の意味を失い，自分自身が原因で崩壊することもありうるという前代未聞のことを，はじめて歴史の側壁に，はっきりと示すことが出来た。象徴的な形象を生み出す神話が，周知のように，既にエウリピデスのいくつかの悲劇の中で批判され攻撃された。ギリシア人の形象の世界を想い浮かべてみよ。この世界が，ギリシア人の信仰でもあるものが，知的な思惟と，思惟によって征服する，つまり知ることが出来また知らねばならないものとにどう対処したか，どう対処することが<出来たか>。このような問いが今はじめて歴史に投げかけられ

た。そのような問いが生れるのは当然であった。なぜならギリシア的な存在も形象も従って思惟も，まさしく古典時代にまた古典時代を通して，一斉に合理的になったからである。

初期のギリシア哲学は，ギリシア固有のものと東方の思索的な文明の影響とを独特の方法で融合したものであった。哲学は，東方文明の影響から，その呪術的な目的と被覆とを取り除き，それを技術的且つ合理的な洞察にした。従ってギリシア人の天文学は，バビロニア人の占星術から発展したものである。ターレスの日食の予言は，その最初の成果の一つである。ギリシア哲学はまた，東方の極めて深遠な知恵をも取り入れた。そこから一切の形象が生れ，再びそこへ帰滅すると言われる，アナクシマンドロスの＜アペロイン＞は，インドの涅槃と極めて類似している。だが，次のことは明白である。すなわち，ギリシア人のこの解放された思惟が，合理的な認識を受容することによって，まもなく，ギリシア人の最も固有な霊的・精神的行為，神話による象徴的な実在形成と対立するという危機に陥らざるを得なかったということである。言い換えれば，かつてディオニュソス信仰が入り込み，そこからオルフィク教的な傾向が広まった時に既に現われていたあの危機に陥らざるを得なかったのである。というのは哲学者は，正しくその本性に従って，存在の象徴的な内容を，これまでのギリシア的形式とは別の形式で表わさねばならなかったから。

それにもかゝわらず，古典期の最初の偉大な代表者たち，すなわち民主的な発展を軽蔑したヘラクレイトス，あるいはアテナイの民主主義の代表者とみなされているあのペリスレスの友人であり腹心でもあったアナクサゴラス，こうした人々についてみると，ギリシア哲学は未だ神話を破壊してはいない。それはギリシア精神がこれまで神話によって表現してきた本質的な内容を，整理し要約することで満足している。ヘラクレイトスによれば，衝動，特性，現象，形象などは，本当は，一つの原質の現われにすぎない。従って我々はこの世界でこの原質の様々に変化した姿を見ているのである。その際彼は，この原質を統括し変形させて，様々な形象の生成変化を生じさせている力を，比喩的に火と呼んでいる。ヘラクレイトスがこのように説明する時，この宇宙論は，ニーチ

ェの指摘する通り[6]，明らかに世界を多くの象徴として捉える考え方に属し，従ってギリシア人のこれまで通りの表現形式を踏襲しているのである。またより偉大なアナクサゴラスは，世界の中心部にヌースを置く。ヌースは，精神とか理性とかと翻訳してはならない。ヌースはむしろ，まわりのすべての物と戯れるが，しかしそれらを法則に従って整理し統合して，混沌から調和宇宙（コスモス）に変える一つの中心であると理解しなければならない。アナクサゴラスがこうしたヌースを世界の中心部に置く時，彼はこの壮大な構想において，依然として，古いギリシア人の宇宙を内在的に捉えよう[7]という態度を代表しており，従ってまた存在を象徴する世界が，存在の本質を映し出すものとして，一定の法則に従って内部からたえず形成されるという考え方を代表している。それ故プラトンも次のように言うことが出来た。古典期のギリシア民族を代表する最も偉大な政治家ペリクレスは，彼の思想の崇高な翼をアナクサゴラスから得たのだと[8]。またニーチェはそれをこう表現している。アナクサゴラスが言ったことは，これまで神話の中で言われてきたことの要約である。人物による象徴の代りに，非人格的な究極的中心とその宇宙的な秩序という表現形式が取られたのだ。

これらが古典期のギリシア民族の最大の成果である。

ギリシア民族は，東方の文明的要素と結合することによって，絶えず新しい養分を補給されていたが，そのギリシア民族の第三の基本的特徴は，合理的な明証性ということであった。この透徹した明証性は，最後は古典主義の形成原理にもなって，この時代に，ありとあらゆる分野に完全に浸透することが出来た。こうしてそれは，事実上神話に取って代ったが，しかし精神的態度の核心までは破壊しなかったように思われる。最初の歴史家ミレトスのヘカタイオスとヘロドトスが，年代記作家であろうと，あるいは未だ言わば逸話の小売人のようなものであろうと，ともかく彼等は神話を離れた合理的な歴史記述を行っている。ツキディデスは，運命という観点から，はるかに深く歴史を捉えている。このツキディデスが，建築学的に言えば，古いギリシア精神の美的表現様式と符合するような方法と芸術形式を未だかなり用いて，歴史記述を構成して

いることはたしかである。しかし本質からみれば，彼はもはや決して神話風の実用主義者ではない。そして同時に合理的な要素が，未だ破壊的な作用は及ぼさないまでも，変革的な作用を及ぼしながら，実に様々な現象の中に現われてくる。それについては，先にちょっと触れたミレトスのヒッポダモスの例をあげるに留めたい。ヒッポダモスは，当時，碁盤の目のような整然とした都市を作る計画を立て，ピレウスをこのような方法で建設した。そのために彼は，アテナイでは，ちょうどソフォクレスがいわば神として崇められているように，英雄的人間として崇められている。あたかも彼が，ソフォクレスのように悲劇を作ったか，あるいはドーリア式の寺院を完成させたかのように。

神話，つまりギリシア民族の古い根源的な実在が，歴史によって侵蝕され，ヌースとこれに関連したものによってわきへ押しやられてしまい，もしここでニーチェのように＜神話的哲学＞のことを語っても，それは単なる象徴的比喩にすぎなくなっているが，これと同じように，やがて上述のような土台の上に，東方文明——それが今やギリシア精神をさらに発展させているのだが——その東方文明の影響を受けて，今日なら厳密な科学と呼ばれるべきものが発達する。当時の厳密な科学の発達については，最近までほとんど知られていなかった[9]。厳密な科学は，古典主義と並んで発展して行った。

すでにアナクサゴラスは，アテナイ人にとって疑わしい存在であった。なぜなら彼等は，アナクサゴラスが神話を何か他のもので置き換えたと思ったからである。それ故ペリクレスは，434 年に，彼の国外追放に同意せざるを得なかった。しかし今やパルメニデスの学派のように，様々な形象をすべて仮象にすぎないと言明したり，あるいは——もっと危険なことには——それらの形象を原子の運動の結果であると理解する人々が現われた。こうした状況から，440 年以後は，音楽も演奏や音楽堂の建設から切り離された。そして音楽の内的法則を知りたいという欲求から，ハルモニアの法則が探求されはじめた。ハルモニアの探求は以前のピタゴラスの数の神秘論に基いて行われたが，やがてそこから数学の最初の公理が確立された。こうした厳密な科学の代表者としてアルキュタスが現われた。彼は，ギリシア精神において，後に厳密な自然科学の本

質となるべきことを為し遂げた。すなわち，質的な考察方法を量的な考察方法に百八十度転換するということである。アルキュタスにとって，音楽のハルモニアは，今日一般に知られているような量的関係に還元しうるものである。そしてその量的関係は，もはや宇宙論的に解釈されるのではなくて，純粋に経験的な事象の複合を意味しているのである。

こうして信仰とは無関係の知識が生れる。それは，信仰を非難しようという意図は少しも持っていなかったが，結果的にはその古い形式の墓堀り人にならざるを得なかった。従って，既にエウリピデスにおいて，神話に対する態度が大きくぐらついているのも，頷けるであろう。すなわち，三大悲劇作家のうち最も繊細で最も苦しんだと思われるこのエウリピデスは，その幾つかの作品において，神話的な事柄を未だ信心深い態度で描いているように見える。しかも豊かな想像力でそれを見事に描いているように見える。——だが，その他の作品において，彼はすでにこう問わなければならない。この神話とは一体何なのか，我々が理性的に考察する時，こうした神々とは一体何なのかと。ここからエウリピデスはやがて，神々を離れた心理的な考察方法に到達する。その最も見事な例が，人々を興奮させずにはおかないあの＜メーディア＞である。

6. 古典主義以後の時代

こうして我々は，ギリシア民族の悲劇に，つまりギリシア民族の最初の解体期に移り，そこに足を踏み入れようとしている。しかしこの解体期は，社会学的基盤が未だ破壊されてはいなかったので，やがてレベルは違うものの，一つの新しい頂点を生み出すことになる。

アテナイを盟主とするポリス・ヒエラルヒーを作ろうというギリシア人の遠大で独創的な企ては失敗する。そもそもこの構想を思いついたのはペリクレスであった。ペリクレス自身は，この目的のために，わざとスパルタとの戦争を開始したのであった。彼は，テミストクレスがアテナイ艦隊とデロス同盟によって築いた基盤の上に立って，この同盟の政治力とかなりの財政力をアテナイに集中するという形で，この企てを遂行した。ペリクレスは，アテナイのいわ

ゆる民主主義を完成させながら，実はこのようにして，この民主主義をギリシア世界のみならず地中海世界をも支配する市民評議会に発展させようとしていたのである。その際彼は，個々のアテナイ人に，役人としての日当を支給することを認めた。この評議会は，さまざまなカテゴリーに分れている同盟市に嘴を容れさせずに，世界を支配すべきであった。またこの評議会は，強力な財政力を支えとすべきであった。そこでペリクレスは，アテナイの金庫に入ってくる1000 タレントの資金の中，四分の三を同盟市に負担させた。そして9700タレント，5200万マルクもの国庫金を貯えた。この国庫金は，現金の出納のように，アテナイに移されたのであった。アテナイの古典主義はさまざまな作品を残しているが，もし我々がそれらを世界の中心を象徴しているものと，つまりこのようなペリクレスの構想を象徴しているものとみなさないならば，それらの作品を完全に理解することは出来ないであろう。またアテーナーがアクロポリスの入口のところで，すでに遠くから，その金色に輝く槍の穂先で，アテナイにやってきて長い記念碑の列を通ってアクロポリスへ登って行く一人一人のギリシア人に，<ここが世界の中心なのだ>と指し示していたことに思いを至さないならば，それらの作品を完全に理解することは出来ないであろう。

従ってアテナイの民主主義，つまりこの市民評議会の手に委ねられたのは，文化と政治の両面にわたって，世界を制覇するという課題であった。市民評議会はこの課題を，芸術と理念の面では，ヨーロッパ圏のその後のすべての成果を光被するような作品を生み出すことによって，解決した。しかし政治の面では，アテナイ人はこの課題を解決出来ないことが判明した。こうした結果は，簡単に，かつては非常によく機能していたアテナイの民主主義から生じたものでもなければ，またローマ人が後に同じく世界支配のために発展させた諸制度がここには欠けていたために生じたものでもない。アテナイ人は政治的才能があった。彼等は自分たちの指導者としてくりかえし偉大な指導者を生み出した。しかしアテナイ人は，ゆるぎなき覇権を確立して行く過程で――そのためにはシシリー遠征も已むをえなかったのであるが――ペリクレス以後の最大の政治家アルキビアデスを，決戦の直前に愚かにも追放してしまった。

彼等はもはやペリクレスやテミストクレスの時代のアテナイ人ではなかった。ちょうどアルキビアデスが天才ではあったが，節度と自制心に欠けていたように。

アテナイの社会全体が，徐々に＜規範のない＞ものに変って行った。神話は古くからのものであって，自然発生的に生い茂り，しかもその生い茂ったものが幾重にも層をなして互に結びついているのだが，その神話が省察によって衰退して行くと，合理的に存在を把握しようとすることの進歩が，430 年頃から次のような事象を可能にした。その事象は，覇権を握ろうとしていたアテナイに，精神病の流行のような影響を与えた。その影響は，429 年にペリクレスの生命を奪ったペストのように，深刻なものであった。すなわちにわかに台頭してきた詭弁が，その結論によって，アテナイとそれが勝ち誇って侵入したすべての地域を，方向のない不安定なものにせずにはおかなかったのである。これらの浅薄な詭弁家の中，初期のプロタゴラスやゴルギアスは，未だ真面目に受け取るべき問題を展開していたと言えよう。しかしその後急速に増大し，民衆に決定的な影響を与えた詭弁家たち，すなわち言葉を概念にし，あらゆることを証明も反証も出来るような弁論家たちの三段論法を発達させた人々——こうした人々が，アテナイ人を，前の時代に確立していた一切のもの，規律と型にはめられていること，優れた自制の代表者として他の民族を支配する可能性などから，ひき離したのである。アテナイ人自身は，そうした代表者として，他の民族を支配するのが当然だと思っていたのだが。ともかく情熱的な気性の持主であったアテナイ人がその規律を失ったことが，つまり，本当は偉大なペリクレスがアテナイ人をギリシア人を支配する評議会に形成しようとしたことの結果ではなくて，むしろ内的な崩壊の結果が，覇権をめぐる戦闘においてことごとく勝利を失わせることになったのである。

アテナイは敗北した。そして新しい状況が生れた。ギリシア民族の，諸民族を征服して世界の指導権を握ろうという計画は，打ちくだかれた。不毛な戦争をくりかえしながら，ギリシア民族はやがてマケドニアに併合される。

けれども権力政治の世界を離れて，この激変した生存状況の中から新たな精

神的な生の形成が芽生えていることに目を向けると，次のことが明らかになる。すなわち，アテナイの崩壊と共に——生活の枠組は事実破壊されずに残ったので——破壊の限界に到達した，ということである。言い換えれば，人々が再びそこに集結し，これまでとは異なるがしかし本質的には同じ方法で，再びそこから発展することの出来るそうした基盤に到達した，ということである。ポリスは，その慣習も内容も含めて，なお健在であり，生き生きとしていた。ただポリスは，一切を包括しようという権力欲を取り去られ，またポリスの周りを照らしていたパトスの一部を奪われていた。古い形式が崩壊した後には，新しい形式で，以前の世界把握の本質が，神話の本質が，人間と国家と宇宙を結合するものが見出されねばならなかった。それはもはや，素朴に働く空想によってではなくて，意識的に考え抜かれた，規範となるような形式において，見出されねばならなかった。

そしてギリシア民族は，彼等の生の凝集が損われてはいなかったので，これまでの本質を変えずにこの課題を遂行することが出来た。彼等は，正しく，外見上は最も深刻な衰亡の時期に，その再建を開始したのである。

まず詭弁からの解放がなされなければならなかった。ソクラテスが例の産婆術によって展開した戦い，すなわち問答を通して物事の本質に到達させようという試みは，より広い立場からみれば，突然襲ってきた混乱の中から，あらゆる言葉の遊戯にもかかわらず，なお破壊されずに残っている倫理を発掘することを意味していた。その倫理は徳（アレテ）——つまり最高善と，決して幸福としてではなく，むしろ＜自分自身における存在＞と翻訳されるべきエウダイモニア——の概念を中心に形成されていた。こうしたものが再び意識されるようになる。それは，古くからの，豊かな，概念的には解明しえない表象の世界のかたい沈澱物のように，未だ破壊されずに残っていた。ソクラテスは，彼に特有なことであるが，物事の本質を明らかにし，それを優先させながら，また現にある古いものには手を触れず，神々には触れるようにとはっきり忠告しながら，未だ存在している共同体の規範に向かって進んで行った。そしてそのために，時代の混乱の中で，あの稀にみる美しい態度で死に赴いたが，ソクラテスはこうし

た行為そのものによって，彼の言説を凌駕していたと言えよう。以前の素朴な水準とは別の水準で，教説よりも行為によって，ソクラテスは自らギリシア精神を再現したのである。その結果今や世界史的にみて極めて重要な事が起こった。それは，破壊されたかにみえた外被，人間と国家と宇宙を結ぶものが，外見上は知的な手段によって，しかし実際には，以前と同じように知的なものを超えた内容によって，再建されたということである。

プラトンの功績は——もしイデアがそもそも証明可能なものならば——イデアを証明したことにあるのではない。プラトンはむしろ，神話に代るものとして，世界の諸々の要因がからみ合っている様を説明する形而上学を樹立したのである。生粋のギリシア人であり，完全な芸術家でもあったプラトンにあっては，この形而上学は，超越界にまで及ぶ壮大な展望を持っている。そしてこうした展望は，歴史から再び消えることはなかった。この形而上学は非物質的なものの現実性とその根本的な意味とを中心思想にしているが，言い換えれば，諸々のイデア，魂，最高領域である善にして一なるものについての理論を中心思想にしているが，こうした思想は，一方では，常に新しい論理的な方法で，また常に新しい側面から，完全に説明されている。しかし他方では，超越的なものの本質について，初期の著作と後の著作ではすでに見解が異なっており，それらを一致させることはそう容易ではない。そしてこの超越界からは，下の存在界に届かんばかりに，神話風に述べられた表象がいっぱいぶら下がっている。これらの表象は，バラバラに存在していて，神話の真理と全く同じように，知的な証明方法では測りえないのである。この理論が対話の形式で述べられているのも偶然ではない。それは，偉大な一にして確固たるもの，それが展開した姿は知的な無矛盾性によっては測りえないもの，また測られるべきでないもの——つまり象徴的な神話なのである。

さまざまな形象が飛び出す容器からでも発展するように，ギリシア世界はプラトンの許で再び発展する。すなわち形而上学と芸術が結びつき，古きギリシア獣神が再興されるのである。プラトンが世界史的な影響においてホメーロスを上まわっているとすれば——実際プラトンが西洋に及ぼした影響は測り知れな

いのであるが——それはプラトンが，このような状況にあるギリシア精神に対して，ホメーロスが750年の状況において持っていたのと同じ意味を持っているからである。プラトンは，ギリシア精神に対して，なるほど神々こそ提供しなかったが，しかし生き生きと作用している神的なものを提供したのである。これによって二つのものが存続する。第一は，彫刻の円熟した表現が更に発展する可能性である。プラトン自身は芸術に関する多様な形態を理論的に否定しているにもかかわらず，こうしたことが起こるのである。第二は，知的な認識方法の進歩である。なぜなら新しい＜神話＞は厳格な知的形式におおわれていたから。芸術の発展と厳密な科学に対して一層重要な意味を持つアリストテレスについては，今はじまろうとしているヘレニズム時代の特有な現象を考察する時にはじめて述べることにしよう。

註

I. (1) 本稿では先に訳出した Alfred Weber: Kulturgeschichte als Kultursoziogie, München, [2]1950, Einleitung pp. 17-28, Kap. 1 pp. 29-40, Kap. 2 pp. 41-96, Kap. 3 A pp. 97-120（『駒沢大学外国語部研究紀要』第8号—11号，第18号『駒沢大学外国語部論集』第30号）にひきつづき，Kap. 3 B I II 1-6 pp. 120—157 を訳出する。ここの中心テーマは，ギリシア文化の特質を，その社会学的背景から解明することである。

II. (1) 原註 次の書物にはこれについての非常に優れた叙述が見られる。Gustave Glotz: La Civilisation Égéenne (L'Évolution de l'humanité), Paris 1923.

(2) Friedrich Nietzsche: Die Philosophie im tragischen Zeitalter der Griechen.

(3) 原註 これについて最も深く考察しているのは次の書物である。Jacob Burckhardt: Griechische Kulturgeschichte, Bd. I.

(4) Nomos agraphos アリストテレス『ニコマコス倫理学』8-13-5 参照。

(5) Nietzsche: Die Geburt der Tragödie oder Griechentum und Pessimismus, Stuttgart 1964, S. 77.

(6) 原註 Nietzsche: Die Philosophie im tragischen Zeitalter der Griechen.

(7) 原語は die kosmische Immanenz. これは始め一つであったものが分れて，そこから宇宙の秩序が成立してくるという考え方で，神話やソクラテス以前の哲

学に顕著にみられるものである。岩崎武雄編『哲学概論』有信堂，1963，21頁参照。

(8) Nietzsche: Die Philosophie im tragischen Zeitalter der Griechen, Stuttgart 1964, S. 335.

(9) 原註 これについては次の書物を参照せよ。Erich Frank: Platon und die Pythagoräer, Halle 1923.